

目的 政治変動の影響を直接受けることが少なかった庶民の衣生活が、欧米文化の流入を契機とし、どのような変化を遂げていくか、各地域にあらわれた様相の差異を明らかにするのが目的である。特に今年是中国地方を対象とした。

方法 本学服装史研究室施行の「明治生活調査」、県・市・町・村史、地誌等の記録を資料とし、これに考察を加えた。

結果 各地域は、かつて有力大名領地、維新の原動力と存ったところをふくむ、本州西部の地域である。新しく流れこんだ欧米文化は、一般の所や村の人にとってほやはり大きなしるしを作った。能義郡では「血税」の語とからみ、洋服姿が暴動のきっかけとなったことをみても、その動搖がうかがわれる。一方産業面では各地が木綿の名産地であったから、ただ外棉輸入に何かうのでなく、米棉を栽培する試みを行っていたなど、これらで見られぬ姿勢がある。いふれにせよ、衣生活の近代化はこころで進んでゆくのであるが、その中に、西端部が海に面し瀬戸内海側から日本海側へと連っているにもかかわらず、中国山地を境とした2つの面を呈することを見ることができた。